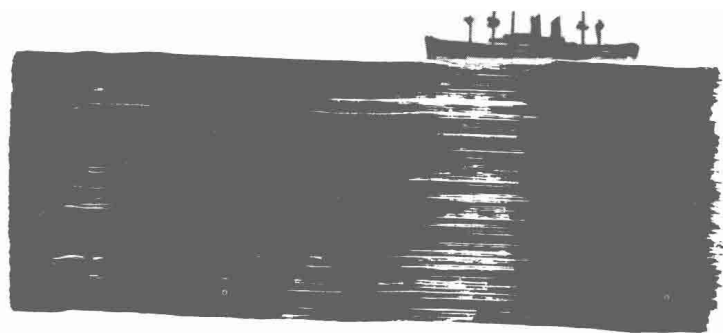


石原慎太郎



新潮社版

航 密

定価 330 円

昭和三十八年五月十一日 印刷
昭和三十八年五月十五日 発行

著 者 石原慎太郎

発行 者 佐藤亮一

発行 所 株式会社 新潮社
東京都新宿区矢来町七一

電話 東京(341)七一一〜九

振替 東京 八〇八

印刷 所 株式会社 金羊社

製本 所 神田 加藤製本所

(乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします)

目次

密航	5
明日に船出を	39
鴨	105
閉ざされた部屋	181
朝の微笑	231

装
幀
岡
本
半
三

密

航

密

航

満月に照らされた海は一面に白く輝き、島影ははるか遠くに、が確かに在った。磨かれた光った甲板に二人の影だけが鮮かなほど黒く落ちている。

船体の蔭になって暗い船尾の海に湧き上り崩れていく巨大な航跡が、船の影を離れると夜目にも真つ白に輝き遠くへ走っていく。水尾の果は遠く暗い水平線にまで煙りながらもほの白く一線になって望まれた。

「いこう」

川口が低く言い、有賀は答えずただ身じろぐように体で頷いた。

「お前が先にいけ」

「なぜだ」

「いいから」

「大丈夫だよ、今さら」

甲板デッキの見張りの影はない。有賀は着ているシャツをゆっくり外し海へ投げた。その動作が一瞬川口には未練に見えた。が、次いで思い直したように彼は素速い動作でズボンと靴を脱いで捨て

た。甲板には何も残してならない。

「いけよ」

川口の声に有賀はふり返り、合わせたように二人は同時に手を延べて握り合った。

「Good luck !」

なぜか有賀は英語で言った。その一瞬二人は確かめ合うように見つめ合い微笑していた。

「待ってるぞ」

後は無言でデッキの手すりを越すと外側へ立ち直り、次の瞬間有賀は渾身の力で舷を蹴って遠くへ飛んだ。

思わず乗り出す川口の眼に思いがけぬほど夜の海に音もせず小さく夜光虫が砕けて光ると、後は何も見えなかった。

船尾の巨大なスクリュウに巻き込まれぬために、飛び込んだまま出来る限り遠くへ潜って逃れなくてはならない。

月光に輝いた海も距離が離れると凝らした眼に暗かった。船が実際には感じている何倍もの速さで走っているのが改めてわかる。次の一瞬、彼は遠くはるかな海に黒いものが浮き出るのを見た、と思い、無理矢理にそれを信じた。

躊躇ちゅうちうしている暇はないのだ。同じように素速く着ているものを投げすてる。残った一枚の海水パンツに、日本で貯めて来た金が全部ぬいつけてある。

手すりを越える。覗いた海は暗く、遠かった。甲板から水面まで優に十米を越す高度だ。一杯

に息を吸い直した時、背後に靴音を聞いたような気がし、何を思う暇もなく力一杯に船を蹴っていた。全身の知覚が宙に放り出され真下の奈落に吸い込まれていく瞬間、彼は自分がたった今のこの一瞬に自分の凡てを賭けているのを痺れるように感じていた。

川口がそのことを実際にやってのける決心をつけたのは有賀と知り合いになってからだ。彼の体の内にくすぶっているものを呼び起すような何かを有賀は持っていた。年齢も、予科練に入って半年で敗戦になったと言う経歴も同じだったが、口数少なくいつも体のしんに根性と他人には覗けぬ何かを持っていると言った性格までがそっくり似ていた。予科練時代の見覚えはなかったが、そんな二人が柄にもなく能弁が要求される通訳と言う仕事に入ったと言うことで、日頃の仕事を通じ自らも知らぬ間に体の内に鬱積したもののまでが同じだった。有賀が川口より一年遅れて横浜のベースに通訳として入ってから間もなく、水が流れるように二人の内に友情が通った。

気骨と言うよりはただ気性として、有賀も川口も占領軍の立場で無理を通そうとする上官にも絶対に言うことを聞かなかった。当時にあつて稀有なそうした日本人は、その稀有さの故に結局は却って心ある米人に重用されることにもなった。

ある日、キャンプ内のクラブで食事した後川口は街へ外出に大きなキャンプ内の遠廻りをさけ、裏側の非常ゲイトを乗り越えに薄暗い倉庫の間を突っ切っていた。

三番倉庫の角を曲った時、前をいく人影を見た。長身で幅広い肩をゆすって歩く後姿からそれが倉庫主任のサージャント・ボールズなのが知れた。

気づいて川口は歩みの速度を落した。ボールズと言うのは日本人雇業者の間では鼻つまみの兵隊だ。何系の米人か知らぬがこの男は未だに徹底して日本人を白眼視している。兄弟の一人が硫黄島で日本軍のゲリラに殺されたせいだと言う訳はあったが、そうした傾向のある米人の内でもこの男だけは徹底して日本人を嫌う、と言うより憎んで見えた。

憎むだけではなく、その感情が仕事の折々に、大きな体に似ずこまごました意地悪に現れて来る。倉庫関係の日本人雇業者や通訳が泣かされるのは決ってこの男が当番勤務の時だ。

意地悪だけではなく、いつかの昼休み休憩中の遊びで日本人のトラック運転手が巫山戯あつて投げあつた何かの鉄板が逸れて通りかかったボールズの肩に当った。次の瞬間、あやまりに頭を下げようとした運転手にその暇を与えず飛びかかると、襟首をしめ上げたままトラックに叩きつけると、反動に返って来る男の顎を力まかせに殴り上げた。

目撃者の話では小柄な運転手の体は殴られたままトラックの荷台の上へ放り上られたそうだ。ボールズは尚も何かわめいて離れていったが、気絶した運転手は二十余貫の大男のたたきつけたこぶしに完全に顎が砕けていた。その事件についてもボールズの言い分が通り結局は日本人の泣き寝入りだった。

川口は前をいくボールズが先刻までクラブのバーで可成り酔って騒いでいたのを思い出した。

彼は一番端の倉庫にある事務室に何か忘れて戻って行くのだろう。こんな所で見つかって酔いの拳句闇に乗じて何をされるかわからずに間の距離を離れた。

ボールズが次の角を曲つたのを確かめて歩き出し、二十米近く歩いた頃、突然前方の暗がりに川口は獣の叫ぶような悲鳴を聞いた。確かにボールズの声だ。用心して立ち止ったが二度三度、その声がつづいた。

舗道を外し、外側の土を踏んで足音をたてぬように川口は声に向って走った。大きな三番倉庫の壁に沿って走り切った時、倉庫事務室の階段の昇り口で争う人影を見た。

倒れているボールズは叫ぼうとしていたがすでに声が跡切れ、争う相手の小柄な体が倒れたままの彼の周りを敏しように飛び跳ね、飛びかかつては蹴りつけるのが暗がりの内にぼんやり見える。蹴られる度にボールズはやがて声もたてなくなる。その間、相手の影は全くひと声も発しない。飛び廻る影が止り、軍曹の荒い息づかいに混って大きく呼吸する気配があると、その後せい一杯唾を吐きつける音がして、影は非常ゲイトの方へ立ち去る。

ボールズは見捨てて川口は思わずその影を追った。

物の蔭に隠れて見守る内、影は飛び上り門へ取りつくと身軽にのり越えて向うへ消えた。その一瞬、門柱の小さな明りに照らされた横顔を川口は見た。通訳に入って間もない有賀だった。

恐らく彼もまた仕事の上の何かでボールズから質の悪い仕打ちと屈辱を受けたに違いなかった。それを黙ってこらえる代りに彼は果敢な夜討ちを相手に加えたのだ。報復は見事に成功した。唯一の目撃者である川口を除いては、ボールズが誰の手でそんな目に会わされたかを知る者

はない筈だった。

それにしても、たとえ闇に乗じたにせよ、かなう筈のない相手をよくも見事に倒したものと、川口は痛快に思うと同時に感心した。

翌日、倉庫勤務にやって来た部下の兵隊が階段の下に倒れているボールズを発見した。倒れたまま蹴りつけられた傷の他に、何よりも、いつかの日本人運転手同様顎が割られ、左の肢の膝が碎けて折れていた。凶器は近くに落ちていた鉄のパイプだ。有賀は最初の一発で相手の膝を狙い、動けなくしておいてから後存分な制裁を加えた訳だ。

ボールズは襲ったのは日本人だとわめきはしたがたとえそうらしくはあっても証拠も目撃者もなく、近くの暗さから言っても申し立ては通らなかつた。全身の怨恨と呪いを晴らされぬまま、軍病院に入れられた後ギプスつきでボールズは本国へ送還されていったのだ。

ベース・キャンプの全日本人雇用者の内に、暗黙の勝利の凱歌が上った。日本人の内誰一人としてボールズ軍曹傷害の犯人が日本人であることを疑うものはなかつた。尤もそれについて確か知っているのは川口たった一人ではあつたにしても。

その事件をきっかけのように川口は有賀に対する親しさを覚えだした。有賀は川口の目撃を知らずにいたが、その一夜を除いても二人の間が近づいていく理由は他にいくつもあつた。

互いのつき合いがすすんで三月ほどして後、川口はあの夜自分が事件を図らずも目撃していたことを告げた。

流石驚いて見返しはしたが、それでも、

「そうかい」

有賀は微笑^{わら}って言っただけだった。

川口が訊ねると有賀はにやにや笑いながら一件の動機やいきさつについて話した。

事件の夜の半月前、軍曹から受けた屈辱を衰えることなく持ちつづけ、その間考えた拳句にたてた計画通りに彼をおびき出して襲ったのだ。一週の内あの週日、あの時間に彼がクラブのバーでいつもあの程度に酔うことも調べていた。

呼び出しの電話はその前々日、わざとしておいた手違いを彼の部下のせいに作り上げ、その夜外から部下に電話し、彼からボールズにまた電話させた。仕事の期限が明日であるし、その夜の内に五分ですむ修整に、仕事では割に几帳面なボールズが必ずオフィスに戻っていくだろうことも計算の内だった。

まともにはかなわぬ相手を先ず動けなくして襲うために、日中目測して軍曹の膝の高さを計り、その高さを目が見えずとも鉄棒で叩きのめせるように練習までしたと言う。その結果、狙いはたがわず、一撃で軍曹の膝の皿は割れていた。

「根性^{こんせい}と計算がありやどんな危いことでも必ずやれるさ」

囁く^{ささやく}と言うよりは、つぶやくように有賀は言った。

それを聞いた時、川口は初めて自分の計画をこの男に打ち明け、彼をそれに誘う決心をしたのだ。

計画は密航だった。

戦後の当時、日本人のアメリカ密航は可成り頻繁な事件であり、その殆ど凡てが失敗すること
で紙面をにぎわしていた。が、有賀の言う通り、綿密な計算と、後は根性さえあれば必ずしも出
来ない仕事ではなかった。いや、必ず出来る筈だった。

密航する目的地のアメリカについては、仕事柄、そこを祖国とするアメリカ人とのつき合いを
通じて得た、他の日本人よりは幾分詳しい位の知識しかなかった。

しかしそこはともかくも日本ではなかった。

そして、日本では考えられぬ可能性が確かに在り得るように思われた。いや、在る筈であつ
た。

横浜で生れ横浜で育った川口は、戦争でつゝえた故郷の街が復興のはかどらぬまま時を費すの
を眺めて来た。横浜に比べ東京ははるかに、と言ったところでその多寡は知れているようにしか
思われない。たとえそれが今のままに復興し建設されていったところで、この日本の内に自分と
言う人間が存分に羽根を延ばして生きていける可能性の生ずるスペースは有りそうには思えな
かった。

ボールズのような人間もいはしたが、彼らが日頃接する米人の殆どは年齢を問わず、すべてど
の日本人よりも若々しく、自然で、いつも生きようとする可能性を感じさせてくれた。

そうした連中につかえながら日々を送る内、自分の希望する将来が一体何であり、何処にあ
り、どんな具合に預けられているのかと言うことを彼は考えつづけた。この国にあっては、自分
の将来を自分の手にとり戻すことすらが意の如くにいかぬような気がするのだ。通訳をしなが